



Title	漢字使用の変遷と当用漢字表
Author(s)	グジエホヴィアク, ピオトル
Citation	日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 158-167
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59671
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

漢字使用の変遷と当用漢字表

ピオトル・グジェホヴィアク

1. はじめに

1.1. 研究の背景

1946年に制定された「当用漢字表」は、日本の漢字政策史の中で、事実上初めての漢字使用に関する制限である。この当用漢字表は1981年に新たに常用漢字表が発表されるまでの35年間有効であった。しかし、それが実際の漢字使用にどのような影響を与えたかは、未だ明らかであるとは言い難い。本研究はこの問題について論ずるものである。

1.2. 研究目的

当用漢字表は、端的に言えば、使用する漢字の数を制限する政策である。では、そこで使用が制限された漢字が、実際に使用されなくなるのはいつごろなのだろうか。また、当用漢字表外の漢字でも、制限にかかわらず使用され続ける文字がある。どのような漢字が表の影響を受け、どのような漢字が影響を受けないのか。本稿ではこのような問題も明らかにしたい。

1.3. 先行研究

漢字政策が実際の漢字使用へどのように影響を及ぼしたか、という問題をめぐる研究は非常に少なく、わずかに永野（1954）と小椋（2011, 2012）の調査が挙げられる程度である。

永野（1954）の研究は、当用漢字表外の漢字がどの程度使用されているかを明らかにすることを目的としたものであり、その対象は、いわゆる四大総合雑誌、『文芸春秋』『中央公論』『改造』『世界』、1952年7月号から1953年6月号までの一年分である。すなわち、この研究は1952-3年という時間を共時態として設定し、そこでの使用状況を調査したものであり、本稿のように時間による使用実態の変化を明らかにしようとするものではない。

もう一つの小椋（2011, 2012）の調査は、漢字政策の改定によってどのような漢字がその影響を受けるかを論ずるものである。具体的には、1956年と1994年に刊行された雑誌と2001年～2005年の雑誌データを使用し、主に当用漢字表から常用漢字表への改定の影響を扱っている。結論としては、2000年代のデータに基づいた分析から、1981年に常用漢字表として追加された文字の82.1%が定着していると主張している。これは時間による変化の研究ではあるが、時間によってどのような文字が定着するのかということが主たる研究テーマである。定着にどの程度の時間が必要となるのかということは明らかにされてい

ない。さらに言えば、小椋の研究は使用が許可されたものがどの程度定着するかという研究であり、本研究は逆に使用の禁止がどの程度守られるかを論ずるものである。その意味で、小椋の研究とは対照的な観点に立つと言えよう。

2. 調査方法と結果

本稿では、当用漢字表が影響を与える時間について考えるため、二つの調査を行う。一つは、文芸雑誌に現れる表外漢字全体を調査し、使用される表外漢字がいつごろから減少するかを調べるものである（これを調査Ⅰとする）。もう一つは、調査Ⅰで得られた結果を検証するために、同じく文芸雑誌を対象に、表内漢字「言」と表外漢字「云」の使用頻度がいつごろから変化するか、具体的にはいつごろから「云」が減少し「言」が増加するかを調査するものである（こちらを調査Ⅱとする）。

2.1. 調査Ⅰ—雑誌に現れる表外漢字使用の変遷

2.1.1. 調査方法

この調査では、表外漢字全体を調査し、それがいつごろ減少するかを明らかにする。具体的な方法は次の表1の通りである。

表1. 調査Ⅰの概要

調査資料	雑誌：新潮社『新潮』
調査範囲	1947年～1961年の15年間
サンプル抽出方法	1947年～1961年の間に出版された『新潮』の3月号 ¹ を選定し、それぞれの号から10ページ分を抽出する。
調査対象	当用漢字表に掲載されていない漢字（表外漢字）。
手順	抽出したサンプルのページから、表外漢字を全て摘出し、その異なり字数・延べ字数を集計する。

調査資料に文芸雑誌を選んだのは、継続性を持ち、長期間にわたって同種類の内容を掲載する媒体であるため、漢字の変遷を具体的にみるのに適しているからである。また複数の著者による文章が掲載されており、その著者の意図した表記が比較的反映されやすい傾向をも持つ。これに対してたとえば単一の小説作品は、選定する作品によって表記の傾向に差が生じやすく、調査結果がそれに左右されやすい。またたとえば新聞は、署名記事が少なく校閲が強力であるため、画一化した表記になりやすい。実際に、新聞には表外漢字はほとんど用いられないことが分かっている。

また調査範囲を当用漢字表の制定された1947年からの15年間としたのは、あくまで便宜的な処置ではあるが、結果的にはこの調査範囲の中で影響が現れていると考えられる。

2.1.2. 調査Ⅰの結果と分析

1947年～1961年の15年間のサンプルを調査して、出現した表外漢字の年毎の字種総数と延べ数をまとめたものが表2、それをグラフにしたのが図1である。なお、実際にどのような表外漢字が使われていたかという点については、第3節に關説するので、そこで出現回数の上位50位までのものを掲げることにしたい。ここではあくまで数値のみを問題とする。

さて、この結果、特に図1を見ると、出現した表外漢字は字種総数・延べ数ともに減少傾向にあることが明らかであるが、とりわけ1952-3年に一つの境目があるように思われる。調査当初の1947年から1952年まで、出現表外漢字字種総数は毎年120字を超えている。これに対し、1953年から1961年では一回もその数値に届かなかった上に、9年中8年は100字以下となった。同様に延べ数を見ると、1952年までは毎年200回を超えていたのに対し、1953年以降は、1956年を除いて200回以下であった。1956年と57年には再び多少増加するものの、1952年以前と比較すれば、大きく減っていることが分かる。

当用漢字表が一般の漢字使用に影響を及ぼすのは、1952-3年頃とひとまずは考えてよいであろう。

表2. 出現した表外漢字

年	字種総数	延べ数
1947	145	213
1948	145	281
1949	126	210
1950	144	220
1951	161	288
1952	136	327
1953	96	168
1954	92	156
1955	88	143
1956	115	203
1957	100	178
1958	94	165
1959	75	108
1960	73	117
1961	69	104

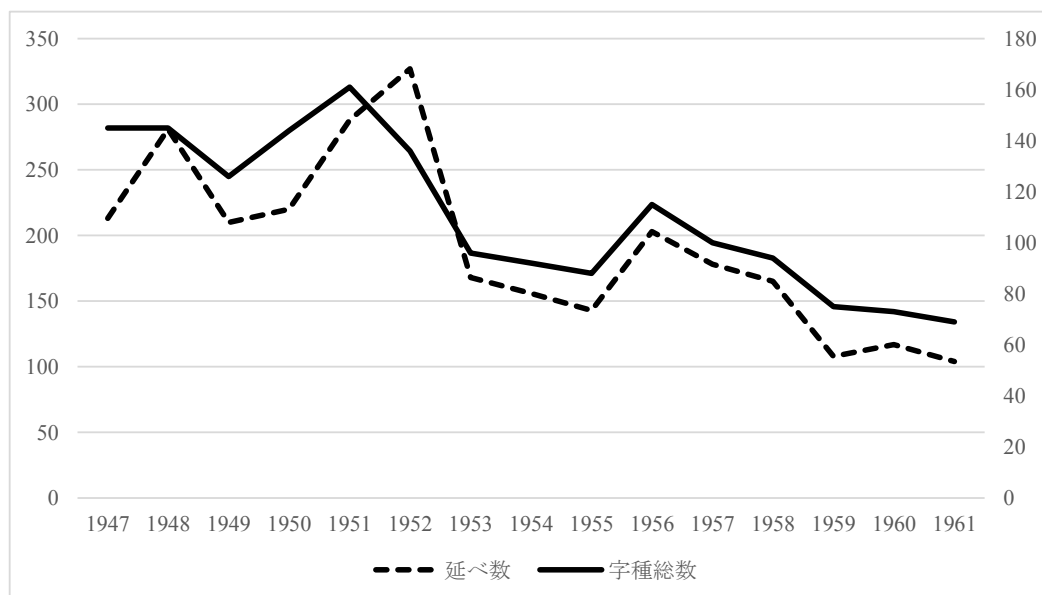


図1. 年毎の出現表外漢字数

2.2 調査Ⅱ－雑誌における同訓異字の使用の変遷

2.2.1. 調査方法

調査□では表外漢字の使用が時間の経過とともに減少する様子が看取された。ただその結果は、漢字使用の実態を知るのに十分とは言えない。単純に表外漢字が使用されるような単語の使用が減ったからという可能性もあるからである。もっともそのことも広義には漢字政策の影響と言えるかもしれないが、同じ語を表記するのでも、表外漢字の使用が別の表記によって代替されていくのだということは、確認しておく必要があるように思われる。

この調査□は、「いう」という動詞に用いられる表内漢字・表外漢字の比率の変化を調べることによって、その表記に用いられる「云」という表外漢字の使用割合の変化を観察する。そしてそれはまた、調査□で得られた結論が妥当なものであるかを検証することにもなるであろう。具体的な方法は次の通り。

表 3. 調査Ⅱの概要

調査資料	雑誌：新潮社『新潮』
調査範囲	1947 年～1961 年の 15 年間
サンプル抽出方法	1947 年～1961 年の間に出版された『新潮』の 2 月号と 3 月号 ² を選定し、それぞれの号から 10 ページ分、合計 1 年ごとに 20 ページ分を抽出する。
調査対象	「いう」動詞の表記に用いられる主な 2 字： 「言」、「云」。
手順	抽出したサンプルのページから、上記の 2 字の出現回数を集計する ³ 。

調査資料と範囲は調査□と同様であるが、本調査は調査□のいわば検算にも当たるものであるから、調査Ⅰより更に信頼性を高めるべく、雑誌から抽出したサンプルを、1 年ごとに 20 ページと、調査□の倍に増やすことにした。

日本語において、動詞「いう」の表記には主に「言」と「云」と「謂」の 3 文字が一般的に用いられてきたが、当用漢字表の制定によって、「言」は表内漢字、「云」と「謂」は表外漢字となった。本調査□は、この中で「言」と「云」という二つの文字の使用比率を調査する⁴ことにより、同じ語の表記における表外漢字使用の減少、表内漢字使用の増加の時期と程度を明らかにしようという試みである。なお、この種の同訓異字が多数ある中で動詞「いう」を選んだ理由は、調査Ⅰの結果では「云」という字種がもっとも多く出現した表外漢字であり、用例数が多い分信頼性も担保されたと考えたからである⁵。

2.2.2. 調査Ⅱの結果と分析

調査Ⅱによって得られた15年間の出現回数と使用割合を表4に挙げた。「言」と「云」の使用は当初拮抗していたが、「云」の使用が徐々に減少する一方、「言」の使用は増加していることが読み取れよう。「言」は当用漢字表に含まれ、「云」は含まれないものであるから、この現象は当用漢字表の制定による影響だと考えられる。

さて、調査Ⅰでは1953年を境に表外漢字使用の減少が見られたが、それは調査Ⅱでも確認されるだろうか。一見する限り調査Ⅰほど明瞭ではないようであるが、平均値を考えると似たような結果が窺える。

「云」の使用割合をみると、1953年までの平均割合は約47%であったのに対し、1954年以降の平均は27%にとどまっております⁶、表外漢字の

表4. 「云」と「言」の出現回数と使用割合

年	云		言	
	出現回数	使用割合	出現回数	使用割合
1947	22	51.2	21	48.8
1948	23	34.8	43	65.2
1949	20	47.6	22	52.4
1950	14	45.2	17	54.8
1951	11	25.0	33	75.0
1952	26	43.3	34	56.7
1953	28	59.6	19	40.4
1954	18	47.4	20	52.6
1955	16	42.1	22	57.9
1956	22	44.9	27	55.1
1957	41	91.1	4	8.9
1958	5	8.3	55	91.7
1959	7	17.9	32	82.1
1960	10	19.6	41	80.4
1961	4	9.8	37	90.2

「云」の使用が明らかに減少していることがわかる。つまり、今回行った調査Ⅱの結果は調査Ⅰの主張を支持していると言えるのである。

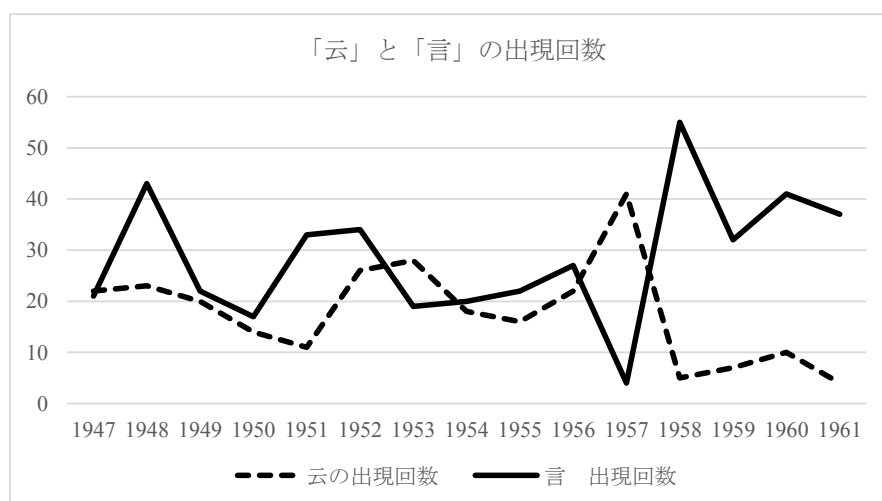


図2. 年毎の出現表外漢字数

2.3. 調査のまとめ

さてここまで、調査□では表外漢字の使用がいつ減少したかを調べ、その全体的な傾向を示した。さらに調査□では、動詞「いう」を表す漢字の変遷をたどり、表外漢字「云」と表内漢字「言」の具体的な使用比率を明らかにすることで、表外漢字が表内漢字に代替されていく様相を明らかにするとともに、調査□の結果を裏付けることもできた。ただし、表外漢字の全体的な使用が減少したことは否めないが、それぞれの表外漢字が具体的にどのような表記に代替されていくのかという点は、なお研究課題として残されている。

たとえば調査□で調査対象とした「云」は、次に挙げる出現表外漢字の上位 50 字種の筆頭にある通り、今回の調査において、表外漢字の中でも最も多数使用されていた文字である。

【調査Ⅰで出現した表外漢字のうち出現回数の上位 50 字種】

云 僕 頃 誰 或 藤 其 蘭 廻 崎 李 鹿 匂 貫 那 喰 坐 旦 篇
眺 俺 類 棟 之 駄 淵 殆 筈 椅 阿 呆 於 此 雇 嫌 仙 猫 勿
沙 須 慾 鱒 戾 夷 逢 隅 趙 鍵 鷹 訊

※1981 年に常用漢字表に追加された文字に下線、2010 年に改定常用漢字表に追加された文字に二重下線を施した。

それだけ頻繁に用いられる文字であったにもかかわらず、現在「云」が通常の文字表記に用いられることはほとんどないと言ってよいであろう。一方で、上記 50 字種の中には、「僕」「頃」のように、常用漢字表やその改訂版に含まれて一般に使用されるものも多い。このような使用状況の違いの理由は、本稿の調査からはまだ明確な解答を導くことはできない。ただそれでも、一つの傾向のようなものは示唆されたようにも思われるので、それについてここで言及しておきたい。

まず「云」を例に考えると、調査Ⅱからも明らかなように、その使用は着実に減少し、一方同訓異字である「言」の使用が増加している。これは調査Ⅰで示した全体的な表外漢字使用減少の傾向と同じであり、政策の影響を強く受けていると言い換えることができるだろう。このような強い影響の理由として考えられるのは、当用漢字表制定以前に「云」と「言」の二様の書き表し方があったために、「言」を使うことにより政策に準じた表記にすることが容易であったということである。つまり、「云」の代わりに表内漢字の「言」を使うことで、簡単に書き換えることができたのである。

一方、調査Ⅰから明らかにあったように、「僕」「頃」「誰」などは、当用漢字表には含まれなかったにもかかわらず、使い続けられ、ついには常用漢字表に追加されるまでになった。このように継続して使用される表外漢字は、当用漢字表内の漢字による書き換えがないことが特徴なのではなかろうか。書き換えのない場合には、表外漢字の使用の減少はゆるやかに起こるのかもしれない。

このように、本稿の調査□・□によって示唆された表外漢字の使用傾向は、表内の同音の漢字による書きかえが可能である文字はその表内字に書き換えられる一方、それが不可能であるものは表外字がそのまま用いられ続ける、というものである。この問題については、次節において、関連する事象について考察を行いたい。

3. 考察一同音の漢字による書きかえ

前節に見たように、「云う」のように表外漢字が含まれる語は、表内漢字による書き換えがある場合（この場合「言う」）、書き換えという処理が有効だという傾向があると考えられた。このことを、もう一つの政策を例にしながら考えたい。それは1956年に国語審議会により決定された「同音の漢字による書きかえ」という政策である。当用漢字表の使用上の注意事項には制定1946年当初に「この表の漢字で書きあわせしないことばは、別のことばにかえるか、または、かな書きにする。」という記載しかなかったが、この書きかえが新たな処理法として提案されたことになる。その性質は次のように定義されている。

当用漢字の使用を円滑にするため、当用漢字表以外の漢字を含んで構成されている漢語を処理する方法の一つとして、表中同音の別の漢字に書きかえることが考えられる。ここには、その書きかえが妥当であると認め、広く社会に用いられることを希望するものを示した。⁷

この方針は表外漢字を含む漢語の交ぜ書き、または漢語全体を仮名書きにすることを避けるための方針であり、表外漢字の代替表記として表内漢字を使用する点で、前節の「いう」と同様の製作である。そしてこの表外漢字から同音の表内漢字への書きかえの提案が定着していることを、簡単な調査を行って示したい。

「同音の漢字による書きかえ」には具体的な熟語の一覧299語が掲載されており、表外漢字を含む表記（本稿では、便宜上「旧表記」と呼ぶ）に対して、同音の表内漢字による書きかえ表記（「新表記」と呼ぶ）が示されている。「旧表記」とは以前から使用されていた漢字表記であり、一方「新表記」とは国語審議会によって「同音の漢字による書きかえ」で推奨され、当用漢字表に準じた漢字表記である。この二種類の表記の使用比率を、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて調査する。調査した熟語数は一覧に挙げられている全例299語であったが、旧表記の使用比率が新表記より高い熟語が29語、新旧表記の使用比率が同程度の熟語が1語、旧表記より新表記の使用比率が高い熟語が269語という結果となった。すなわち、表内漢字を用いた新表記の方が圧倒的に広く用いられているのである。それぞれの例を旧表記・新表記という順で以下に挙げた。

1. 旧表記の使用比率が新表記より高い例： 燻製・薫製、惣菜・総菜、抒情・叙情、教

誨・教戒、研磨・研摩、漁撈・漁労 など。

2. 新旧表記の使用比率が同程度の熟語： 皆既蝕・皆既食。

3. 新表記の使用比率が旧表記より高い例： 智慧・知恵、蒐集・収集、鞏固・強固、註解・注解、交叉・交差、防禦・防御 など。

さらに、それぞれの熟語の出現回数と新旧表記の使用比率を分析した結果、興味深い傾向がみられた。調査した 299 の熟語の中で、合計出現回数 1000 回以上の使用頻度の高い熟語は 51 語あったが、推奨された表内漢字の表記より表外漢字表記の使用率が高い熟語が現れず、書きかえ表記のほうが一般的に広く用いられていることが分かった。つまり、使用される熟語ほど、新表記が定着していると言えるであろう。一方、表外漢字表記の使用比率が高い 29 熟語を見ると、合計出現回数が平均 73 回という低い出現回数が目立つ。つまり、新表記が定着していない理由の一つとして、熟語の低い使用頻度が考えられる。

このことから、表外漢字の使用を制限する政策として、表内漢字に基づく書きかえを提案することが、使用者にとって受け入れやすい政策であると言えるのではないだろうか。

そしてそこから考えれば、前節の調査Ⅱで見た「いう」の表記において、表外漢字「云」が時間の流れとともに表内漢字「言」に置き換わっていったのも、「言」という書きかえ字に相当する文字が当用漢字表内にあったことが理由になっていると考えてよいだろう。逆に、「僕」、「誰」、「頃」などは表内に書きかえ可能な文字がなく、これらの文字を使わないとすればひらがな表記を選択するしかない。それゆえに、書きかえは定着せず、表外漢字が使用され続けるのではなかろうか。

4. 結論と今後の課題

本稿では、日本語における漢字政策について論じてきたが、その中で 1946 年に制定された当用漢字表とその影響に焦点を当てながら考察を行った。

結論を簡単にまとめれば、全体的な表外漢字の使用総数は減少傾向にあり、それは当用漢字表の影響を受けたものと解釈できる。特に、1953 年を境に表外漢字の使用が比較的に減少したことが明らかとなった。そのことは、動詞「いう」の表記に用いられる表外漢字「云」と表内漢字「言」の使用の割合からも確認された。

さらに、この「云」と「言」についての調査からは、表外漢字の使用が減少することが表内漢字による書き換えの有無に関連していることが示唆された。このような書きかえの有無が与えた表記の影響としては、「同音の漢字による書きかえ」の政策も全く同様の結果を生んでいる。そこで新しく推奨された、表内漢字による書き換え表記の使用率は旧表記に比して明らかに高く、本来と異なった表記を含め、新表記が定着している。つまり、同音の文字による書き換えが、表外漢字を駆逐し、表内漢字を定着させるのに、使用者の受け入れやすい処理法であると言えるであろう。

しかし、表内漢字による書き換えは確かに当用漢字表の定着に一部貢献したといえるものの、それ以外の方法で定着した表記法もないわけではない⁸。どのような方法が定着し、どのような方法が定着しなかったのか。それは、日本人の言語観・表記観とどのように関わっているのか、という問題に展開する射程を持つであろう。また、同音の文字による書きかえだけを取り上げてみても、わずかであるとはいえ、旧表記の使用比率が新表記より高い熟語も存在していた。それはわずかではあるけれども、原因を追究する必要もある。書き換えが受け入れられない条件を明らかにすることも、今後の課題の一つに挙げることができるだろう。

参考文献

- 阿辻哲次(2010a)『戦後日本漢字史』新潮社
阿辻哲次(2010b)『漢字と日本人の暮らし』大修館書店
井之口有一(1982)『明治以後の漢字政策』日本学術振興会
沖森卓也(2011)『日本の漢字 1600 年の歴史』ベレ出版
小椋秀樹(2011)「漢字使用の実態--表外訓・表外字の使用について」『国文学:解釈と鑑賞』
76(1), pp.67-75, 至文堂
小椋秀樹(2012)『科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書』(研究課題
名:「漢字政策の改定が漢字使用に及ぼす影響に関する研究」課題番号:
21720167)
笹原宏之(2006)『日本の漢字』岩波書店
笹原宏之(2011)『漢字の現在:リアルな文字生活と日本語』三省堂
白川静(2003)『漢字の世界—中国文化の原点』平凡社.
高島俊男(2001)『漢字と日本人』文藝春秋
永野賢(1954)「漢字制限と当用漢字」『国語国文』23(11), pp.607-619, 中央図書出版社
林史典(2010)「改定常用漢字表の意義」『日本語学』29(10), pp.14-21.明治書院
前田富祺(2010)「漢字施策と改定常用漢字表」『日本語学』29(10), pp.4-13.明治書院
文化庁,国語審議会「標準漢字表」1942 年
文化庁,国語審議会「当用漢字表」1946 年
文化庁,国語審議会「常用漢字表」1981 年
文化庁,国語審議会「常用漢字表」2010 年
安田敏朗(2007)『国語審議会:迷走の 60 年』講談社現代新書
安永実(1981)「常用漢字表が生まれるまで—国語審議会における当用漢字再検討の歩み」
『言語生活』(355), pp.24-31. 筑摩書房

¹ 基本的には各年の3月号を用いたが、1948年は3月号が入手できなかったため直近の4月号を、1949年はほとんどの号が入手できなかったために10月号を、それぞれ用いている。このことによる結果への影響は、全くないとは言えないものの、大勢には影響はないと思われる。

² これも調査Iと同様、基本的には各年の2月号・3月号を用いたが、当該号が入手できなかったために別の号を用いた年がある。まず1948年・53年・54年は2月号と4月号。1949年は6月号と10月号。1951年は3月号と4月号である。これも結果への影響は否定できないが、大きな問題とはならないと判断した。

³ その出現回数は動詞「いう」の表記に用いられる場合に限定し、調査対象の字種を含む熟語は対象外とした。たとえば「云」の場合は「云々」など、「言」の場合は「言論」「文言」など多数あるが、これらは調査対象外とする。

⁴ 「謂」の出現回数は「言」と「云」と比べて非常に少数であるため、本調査の対象から除く。もちろん、これを含めて考えても結論には影響はない。

⁵ 2.3節に出現表外漢字の上位50字種を挙げているので、参照されたい。

⁶ 今回の研究では全体的な傾向に焦点を置いた考察を行っているため、1951年と1957年の割合を平均値計算の際に除くことにした。また、ここで指す平均値とは、使用割合の平均値である。

⁷ 「同音の漢字による書きかえ」について（報告）（文化庁 Web サイト kokugo.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kakuki/03/bukai03/03.html）

⁸ たとえば指示詞や副詞などは、漢字表記がほぼ完全に駆逐され、ひらがなによる表記が定着している。